

国分寺1976

(3)『シングル・マン』と1976年の忌野清志郎」

国分寺のまち、ひと、自然、歴史などを紹介するポッドキャスト番組、「国分寺レイディオ」は、東京経済大学地域連携センターが制作、運営しています。

こんにちは。ライターの前松佐左衛門です。

シリーズ「国分寺1976」、第3回は、『シングル・マン』と1976年の忌野清志郎』というタイトルでお届けします。

それでは最後までお付き合いください。

改めましてライターの前松佐左衛門です。

今回は『シングル・マン』と1976年の忌野清志郎』というタイトルでお話します。

これだけでお分かりになる方は、よほどのRCサクセションファン、忌野清志郎ファンだと思います。

『シングル・マン』は、1976年に発表されたRCサクセションのアルバムですが、完成してから1年以上発売が延期され、発売されてもその年の内に廃盤になった悲運のアルバムです。

今回は、このアルバムが発売された1976年頃を中心に、国分寺で育った忌野清志郎という不世出のバンドマンの話をしたと思います。

忌野清志郎さんは、2009年5月2日に58歳で亡くなりました。

その翌々日に、私は西国分寺から国立へと向かう「多摩蘭坂」を歩いていたのですが、清志郎さんの写真、花、缶ビールなどがたくさん置かれている一角に目が留まりました。

かつて清志郎さんが70年代の中ごろに短期間住んでいたアパートがあったところで、RCサクセションの『多摩蘭坂』という曲にうたわれている場所です。この曲は特にファンの間で人気が高い曲ですね。

私よりも少しだけ年上と思われる二人の男女がしゃがんで手を合わせていました。

現在、50台後半から60台前半ぐらいの私たちの世代にとって、RCサクセション、忌野清志郎というのは特別な存在なのです。

忌野清志郎さんの本名は、栗原清志といます。

生まれは中野ですが、就学前に国分寺に来て、みふじ幼稚園、国分寺第二小学校、第三中学校に通います。絵を描くのが好きだったようで、第二小学校5年生のときには自分で描いた

マンガを、当時国分寺に移転してきたばかりのタツノコプロに見てもらいに行ったこともあり、タツノコプロの社長の吉田竜夫さんは、「キミ、うまいねー」と言ってくれたと清志郎さんはインタビューで話しています。子どもの頃の夢は漫画家になることでした。

しかし、第三中学校に入ると、興味は音楽に移ります。

60年代初めに大流行していた、エレキ・インスト・バンドのベンチャーズに興味を持ち、やがてピーター・ポール&マリーなどのフォークソングを演奏することになります。

都立日野高校に進学すると、在学中に RC サクセションを結成し、高校卒業直前の1970年3月にレコード・デビューします。

RC サクセションは、第三中学校で同級生だった、ベースのリンコ・ワツショー（小林和生）とギターの破廉ケンチ（桶田賢一）の二人と結成した3人組のアコースティック・バンドでした。

RC サクセションという名前の由来については、1980年頃には、「ある日作成しよう」と思ったから、などと説明されていましたが、正確にはこのような由来になります。

清志郎さんが中学生のときに最初にクローバーという3人組のグループを組みます。3人だから3枚の葉っぱを持つクローバーということで名付けたそうです。3人は中学校の謝恩会で発表しますが別々の高校に進んだために解散します。

3人のうち幼馴染で家が数分に距離にあった二人が、これまた家が数分のところにある中学の先輩を誘って組んだのがザ・リメイダーズ・オブ・クローバーです。クローバーの残りという意味だそうです。

ザ・リメイダーズ・オブ・クローバーが解散したあと、最初のクローバーを組んだ三人が高校2年生のときに再び集まりグループを組むのですが、その名前を、ザ・リメイダーズ・オブ・クローバー・サクセションと付けたものの、あまりにも長いので略して RC サクセションとしたということです。ややこしい話ですね。

ちなみに、2番目のリメイダーズ・オブ・クローバーは破廉ケンチさんの代わりに中学の先輩の武田清一さんが入っていました。

武田さんはのちに「日暮し」というグループでメジャーデビューし5枚のオリジナルアルバムを残します。現在は、国立で「カフェ・シングズ」というジャズ・カフェを経営されています。

RCサクセションは、デビュー当時、フォーク・グループと言われていましたが、アコースティック・ギター2本とウッド・ベースから繰り出されるリズムは、ソウル・ミュージックに根差した、アコースティックでありながら太いうねりのある類を見ないものでした。ハード・フォークというような呼ばれ方もされています。高校生の頃に出会い、その後の人生で追い求めるようになる清志郎さんのアイドルは、ソウル・ミュージックのレジェンドであるオーティス・レディングやサム&ダイブだったからでしょう。

デビュー・シングルは、『宝くじは買わない』、カップリング曲は『どろだらけの海』でした。最初の曲からすでに、お金で買えないもの（愛する人）や公害問題をテーマとしているのが

忌野さんの20年後、30年後の姿に重なります。

1972年にシングル『ぼくの好きな先生』がスマッシュ・ヒットし、この年に1枚目と2枚目のアルバムが発売されますが、その後は鳴かず飛ばずとなり低迷期に入ります。

渋谷のライブハウス「青い森」での定期ライブでは少数の熱心なファンがいましたが、忌野さんが骨身を削るように作った曲の本質を理解せずに自分たちをアイドル扱いする女子高生のファンにステージでつらくあたるなどをしたためにファンは増えません。むしろ減ってゆきます。

この時期に数少ない男性のファンとして「青い森」に通い続けたのが、当時、資生堂宣伝部で働いていた太田和彦さんでした。

太田さんの本業はアートディレクターですが、居酒屋を紹介するエッセイやテレビ番組でも有名ですのでこちらの方でご存じの方も多と思います。

太田さんは、忌野さんの書く、心を締め付け、ひりつくような詩と、アコースティック・ギター2本とウッド・ベースだけで奏でられるとは思えない魂のリズムに魅せられ、毎回、ラジカセで録音して聴き返していました。

1972年から数年間のRCサクセッション暗黒時代には、レコードが発売されず、ライブの記録もないため、2013年にCD化された太田さんのカセットテープ音源『悲しいことばかり』は、当時のライブの迫力と4曲の優れた未発表曲を聴くことができる貴重な資料です。この4曲のうち、「僕の家の前を今朝も小学生が通います」という曲では、子どもの頃に遊んだ一本松の丘には住宅が建ってしまい、お茶畑だったところはボウリング場になってしまったけれど一番変わってしまったのは自分なんだということがうたわれています。ちなみに、先ほど紹介した武田清一さんのカフェ・シングズで、2018年に太田さんと武田さんのトークイベント「楽しい夕に～国立で初期のRCサクセッションを語る」が開催されました。イベント内容は小冊子化され国立の増田書店で買うことができます。

「青い森」では、もう一人のちに有名になる熱心な男性ファンがいたのですが、それはまだアマチュアだった泉谷しげるさんです。泉谷さんはRCサクセッションを崇拜していると言ってもよいほどのファンでしたが、その後すぐにプロになり売れてゆきます。

この頃、売れずにじり貧だったRCサクセッションは、同じ事務所所属し、自分たちのライブの前座だった井上陽水さんが突然爆発的に売れ出して、自分たちが逆に陽水さんの前座となることも経験しています。

陽水さんは、1973年のアルバム『氷の世界』が大ヒットし、日本のレコード史上初の100万枚のセールスを記録しました。

このアルバムに収録された13曲のうち、2曲は清志郎さんと陽水さんの共作曲です。

特に、まだ売れなかった頃の陽水さんが三鷹のアパートで清志郎さんと一緒にギターを弾きながらつくった『帰れない二人』という曲は、清志郎さんのファンにも愛される名曲です。この2曲は清志郎さんのどん底時代を経済的にも救うことになりました。

100万枚以上を売り上げたアルバムの2曲の印税が500万円ほどになり、 Hammond・オルガンなどの新しい楽器を買ったりしたそうです。

しかし、お金はすぐに使ってなくなってしまったそうです。

他にも、このどん底時代には、売れ始めたころの矢沢永吉さんなどの前座をやっていて、地方公演などでは「帰れコール」を浴びたりしています。

この時期は、音楽的に難解なことに挑戦していかうとしたことが逆に数少ないファンを失ってゆくことにつながっています。

それでも、ライブの仕事がなくなってゆき暇な時間が多くなったので、清志郎さんはピアノ教室に通ったり、ベースのリンコさんは東京芸大の専科でベースを学び直したりして音楽的に深化しようと模索していました。

この頃、1日10時間もギターを弾いていたと清志郎さんは後に語っています。

それでも、RCサクセションの所属事務所スタッフやレコード会社のディレクターにはレコード制作につなげようとする味方もいました。

ライブハウスの経営者やテレビ局のディレクターなども含めて、業界関係者の中には彼らの突出した才能を信じて応援してくれる人たちがいたのです。

所属事務所にほったらかしにされているような状況だったRCサクセションは、1974年にひそかにレコーディングを始め、翌1975年春にアルバムは完成します。

このアルバムが『シングル・マン』です。

アルバムが完成しても、所属事務所との関係が悪化していたために、発売は1年後の1976年4月になり、その年のうちに廃盤となってしまいます。

『シングル・マン』には、後にRCサクセションの代表曲となる『スロー・バラード』が収められています。

説明するまでもない名曲ですが、この曲によって清志郎さんは、自分が最も影響を受け続けてきたソウル・ミュージックを土台にして、言葉とリズムとサウンドがくっきりと一つになる自分のオリジナル・フォーマットをここで作りあげたのではないかと思います。

苦さと甘さ、現実の重さとロマンチズムといったものが交じり合った、胸を締め付けられるバラードです。

特に、物語の舞台が市営グラウンドの駐車場というところが、自分たちのリアルな生活の中にロマンチズムと希望を見いだす言葉の力を感じさせてくれます。

このアルバムのレコードB面は『スロー・バラード』で終わりますが、B面最初の曲は『ヒッピーに捧ぐ』という曲です。RCサクセションの古くからのファンがとても大事にしている曲です。

この曲のレコーディングの歌入れのときに、清志郎さんがスタジオのブースで歌い始めると、そこにいたスタッフやメンバーは感情をすべて持っていかれたようになり動けなくなったそうです。

最初は静かに始まり、やがて感情がほとぼしるように噴出するこの曲は、RC サクセションのサブ・マネジャーだったスタッフが心臓まひで突然亡くなってしまったことから作られた曲です。

当時、22～23歳だったメンバーよりも二つ三つ上でメンバーから慕われていた彼のニック・ネームは「ヒッピー」でした。

20歳を過ぎたばかりの彼らにとって「清志、オレがお前らを有名にしてやる」と言っていた信頼する兄貴分の死は受け入れがたいものであり、それに向き合うためには歌にすることがどうしても必要だったのでしょう。

アルバムの発売が延期を重ね、せつかく出たと思ったら半年ほどで廃盤になるというのはバンドにとってあまりにもヘビーな状況でした。

そんな中で、オリジナル・メンバーの破廉ケンチさんが精神的な理由で休みを取らざるを得なくなりその結果として脱退するということが起こります。

オリジナルのRC サクセションは崩壊しつつある状況であると同時に新たな創造の段階に入っていました。

『シングル・マン』の直後に発売されたシングル『わかってもらえるさ』の歌詞には、

「この歌の良さいつかきつと君にも わかってもらえるさ いつか そんな日になる ぼくらは何もまちがってない もうすぐなんだ」

とあります。

理解してくれない状況のつらさを歌うと同時に、自分たちがやっていることはまちがっていない。認めてもらえないだけなんだという、それを対象化して見る視点を清志郎さんほどんだ状況でも持っていたことがよくわかります。

この頃から、RC サクセションは、アコースティック・バンドからエレクトリック楽器のロックバンドに変化してゆきます。

泥沼のような低迷期のなかで、清志郎さんの考えが変わったことがロックバンド化を進めてゆくことになりました。

それは、売れないなか、客が理解してくれないからだという言い訳をしながらどんどん曲が複雑化し高度化していくことで聴き手を遠ざけてゆく愚かさに気付かせてくれる出来事があったためです。

後に結婚することになる石井さんと付き合うようになり、石井さんの父親からも自分の父親からも生活能力のなさについて厳しく責められ結婚を反対されたことがきっかけでした。清志郎さんはここで、売れなきゃならない、スターにならなくちゃならないと本気で考えたこととインタビューで答えています。

自己満足の高度な音楽ではなく、ローリング・ストーンズやキッツを何度も聴いて、売れる音

樂、すなわちわかりやすく志も持つロック音楽をこれからは作り出してゆこうとしたのです。

こう考えて作られた曲が、『雨上がりに夜空に』や『ラプソディー』といった、数年後に RC サクセッション・ブームを引き起こすことになる名曲たちです。

『ラプソディー』は石井さんのことを歌った曲だと清志郎さんはインタビューで話していません。

70年代後半は、盟友となるギターの仲井戸麗市(チャボ)、ドラムスの新井田耕造、キーボードの G2 を次々とメンバーに引き入れ、長髪を切り、髪を逆立てて、メイクをしてステージに立つようになり、ライブハウスには新たな客が押し寄せるようになります。

1979年、3年ぶりのシングル『ステップ』が発売され、何年かぶりにテレビ出演などのプロモーションに忙しくなります。

口コミでライブハウスの動員数が日を追って増えてゆくなか、アルバムを求める声が出始めてきます。

それが、廃盤になっていた『シングル・マン』の再発運動につながります。

音楽評論家の吉見佑子さんが中心になって頑張った再発運動にレコード会社も折れて、300枚の限定発売をしましたが、たった3つのレコード店（そのうちの一つは国立のレコードプラントでした）の発売だったにもかかわらず、10日で完売します。

翌1980年には再プレス、再々プレスがされましたが、すぐに完売となったように RC サクセッションの人気には火がついていたのです。

アルバム『シングル・マン』の復活と、RC サクセッションの復活が重なったのです。

1980年になると、ライブハウスではすでに収容しきれない動員数になり、2月には渋谷公会堂に2千人もの客が押し寄せ、4月の久保講堂でのライブが6月にライブアルバム『ラプソディー』として発売されます。

ライブであれだけすごい RC サクセッションがレコードでは今一つといった評価が、ライブアルバムを出すことによって劇的に変わりました。

特に『ラプソディー』というアルバムが当時の高校生に与えた影響の大きさ、深さは相当なものでした。

私は高校1年生でしたが、クラスメイトの何人かが RC サクセッションの虜になり教室でいつも歌っていたので『雨上がりの夜空に』は歌えるようになってしまいます。全国にこのような高校生は当時どれだけいたのでしょうか。

RC サクセッションの人気はこの頃から、まさに火が付いたといった勢いで上昇してゆきます。この年には、スタジオ・アルバム『プリーズ』も発売され、シングル・カットされた『トランジスタ・ラジオ』はスマッシュ・ヒットしました。

この頃の RC サクセッションは一大ブームが巻き起こっていたという感じでした。

広告や映像などのクリエイターたちも注目するようになりブームは加速してゆきます。

「ビックリハウス」や「宝島」といった、当時10代後半の少年少女たちが熱心に読んでいた雑誌ではいつも出ているという印象を受けるほど取り上げられていました。

80年代半ばになると、ライブには多くのファンがやってくる状態は変わらなかったのですが、人気は落ち着いてゆきます。

そんな中、1986年4月に世界を震撼させた出来事が清志郎さんの創作意欲に火をつけることになりました。

それは4月に起こったチェルノブイリ原発事故です。

この事故は世界中に反原発のうねりを作り出すこととなります。

日本でも反原発の本が多数出版され、ザ・ブルー・ハーツ『チェルノブイリ』や佐野元春『計画通り、警告通り』といった反原発の歌も出てきました。

清志郎さんも1988年のアルバム『マービー』の中に『SHELTER OF LOVE - ツル・ツル』という反原発ソングを入れています。

しかし、この曲はお得意のセクシャルな歌詞の中に巧妙にメッセージを入れたためにレコード会社では問題になりませんでした。

『マービー』のすぐあと、同じ1988年に作られた『カバーズ』は社会を巻き込む問題提起となります。

1950年代から60年代の欧米のヒット曲（それは清志郎さんと同世代であれば多くのロック・ファンが歌える名曲ばかりです）を自身が意識した日本語詞をつけてカバーしたこのアルバムは、原発反対の強いメッセージの曲がいくつかあることを理由にレコード会社は発売中止にします。レコード会社の親会社が原子力発電所のプラントを製造していたからとも言われています。

そのときのレコード会社の広告が「素晴らし過ぎて発売できません」だったと思います。

このアルバムは別のレコード会社から発売されると、初登場オリコン1位となり20万枚以上の売り上げを記録しています。

RC サクセッション初のオリコン1位です。

プロテスト曲であり過ぎるのではないかといった疑念もアルバムに参加した泉谷しげるさんなどからはありました。

このアルバムは全11曲の楽曲のすばらしさではなく、反原発という話題性のみで語られてしまっていたことに私は違和感がありました。このアルバムの本質は、ロック音楽が60年代には明確なカウンターカルチャーであり、理想主義的メッセージを強く持っていたことが楽曲のすばらしさと相まって世界中の若者たちに強く深い影響を与えていたことの原点に、そうした若者たちの一人であった忌野さんが立ち返り真剣に向き合った結果として出来上がった傑作アルバムだということなのです。

2011年3月に東日本大震災が起き、福島第一原発の事故が起こると、このアルバムの取

録曲である「サマータイム・ブルース」は再び脚光を浴びることになります。

『カバース』を発表したあと、清志郎さんは創作意欲に火が付いたようで、覆面バンド「タイマーズ」として多くのプロテスト・ソング（その中には、ふざけ過ぎているもの、お笑いのもの、自分たちの感情を叩きつけるものなど様々なものがありました）を量産し、1988年～1989年にかけて、とりわけ1989年秋には大学祭ツアーを大げさではなく毎日のように行っていました。

就職2年目だった私は、仕事帰りに明治大学や成城大学などでのライブを食い入るように見つめていました。

1990年に、メンバーの二人が抜け、清志郎、リンコ、チャボの3人になってしまったRCサクセションは、最後のアルバム『バイビー・ア・ゴー・ゴー』を発表したあとに活動を休止し、その後の復活はありませんでした。

清志郎さんは、1990年代は様々なバンドを作り活動を続けますが、1999年のアルバム『冬の十字架』に収録されたロックバージョンの「君が代」の発表がこの時期のトピックスだと思います。

テレビではTBS ニュース23の筑紫哲也さんが取り上げたと記憶していますが、イギリスの新聞「ガーディアン」の取材に対して、清志郎さんは日本のメディアがちゃんと取り上げないことそのものが日本のロックの問題なのだといった回答をしていました。

2000年代に入ると、2003年の『キング』、2005年の『ゴッド』、2006年の『夢助』の最後の3枚のアルバムと2008年の『復活ライブ』を立て続けに発表してゆきます。この最後の4枚のアルバムは清志郎さんがそれまでやってきたことの集大成のように感じます。強く深く影響を受け続けてきたソウル・ミュージックをベースに、言葉と音楽が一つになり私たちの胸を貫き自然と前を向かせる曲がここには並んでいます。

特に、最後のオリジナルアルバムとなった『夢助』で演奏しているのは、憧れだったオーティス・レディングやサム&デイズなどのバックで演奏していたブッカーT&MGsのメンバーであり、プロデューサーはそのMGsのメンバーの中心であるギターのスティーブ・クロツパーでした。

『愛と平和』、『GOD』、『JUMP』、『誇り高く生きよう』、『激しい雨』、『涙のプリンセス』といった曲は、すでに中年となった私たちに忘れていた熱いものがよみがえるように感じさせるものでした。

忌野清志郎という人は、自分のすべてをさらけ出し、自分の感じている違和感を作品にしないとやっていけない不世出のアーティストでした。

本人はアーティストと呼ばれることを嫌い、バンドマンという呼ばれ方を好んでいましたが。

忌野清志郎という人を、例えばジョン・レノンのように聖人君子に祭り上げるようなことはしない方が良くと思います。

人としてどうだろうか？といったところもあった人なのだけれども、残された言葉や音楽は、深く考え悩み喜び命を削って作り出されたものであり、今も私たちに考えさせ前を向かせるものです。

ジョン・レノンの名前が出ましたので思い出したのですが、1988年の『カバース』の最終曲は『イマジン』でした。

この曲に付けられた日本語詞は、この曲の訳詞として優れているだけでなく、ロックの名曲の意識詞として究極のお手本ではないかと思います。

特に、コーラス部分での「僕らは薄着で笑っちゃう」という歌詞が素晴らしいと思います。「窓の外は雪」という自身の曲の一部分を「イマジン」の間奏部分で使っているのですが、理想主義のもろさと強さを同時に歌に込めているところが、コーラスの桑武伊助さんの声も含めて本当に素晴らしいと言うことしかできません。

ここで話を再び1976年の『シングル・マン』に戻したいと思います。

『シングル・マン』のレコード制作のディレクター・プロデューサー、アレンジャーは、1973年の大ニュースになるほどヒットした井上陽水さんの『氷の世界』と同じです。

所属事務所とのゴタゴタがなく、予定通りに発売されていたらもっと売れていてRCセッションの運命も変わっていたかもしれません。

しかし、あとから歴史を振り返ると、『シングル・マン』での躓きは必然だったように思えます。

『シングル・マン』に詰まっている、やるせなさ、切なさ、愚かさ、かなしみ、怒り、そして諦念としか言いようのない感情の深さといったものは、忌野清志郎という人間の持つ本質なのではないかと思います。

このアルバムの内容から考えると、井上陽水さんとおなじ制作スタッフが作り上げたとはいえ、1976年に多くの人々に受け入れられることはやはりなかったのではないのでしょうか

サニーデイサービスの曾我部恵一さんは、清志郎さんが亡くなった直後にロッキング・オンが出した追悼特集のなかでこのように書かれています。

『シングル・マン』は本当にすごいアルバムだ。

生命を持って生きているレコードだ。

いつ聴いても、ひとりの人間がそこに現れ、歌いだす。

こんな奇跡のアルバムがあるから、ぼくはいまだにしつこく「アルバム」ってやつを作りつづけ

ている。

1965年に国分寺第三中学校の同級生3人が作ったフォーク・グループは別々の高校に進んだことで消滅しましたが、高校2年生のときには再び集まり、1969年にテレビに出て1970年にレコード・デビューします。

清志郎さんが日野高校3年のときの担任だった美術の小林先生のことを歌った『僕の好きな先生』のヒットがデビュー2年後の1972年にはありましたが、低迷を続けた3人のグループがそれでもあきらめずに追求してきた音楽は、1976年の『シングル・マン』にまとめられることになりました。

しかし、この直後に一人が欠け、3人の新メンバーが加わり、同じ名前でもまったく別のバンドになります。

多くの人たちにとって、RCサクセションというバンドというと、1980年以降の5人の姿が思い浮かぶのではないかと思います。

しかし、RCサクセションそして忌野清志郎の本質は、1980年に発表された『ラブソディ』と同年に再発された『シングル・マン』の両方にあるのです。

『シングル・マン』というアルバムをもっと多くの人に聴いてもらいたいと思いここまで話してきました。

ご清聴ありがとうございました。

<第3回終了>

これで「国分寺1976」第3回『シングル・マン』と1976年の忌野清志郎を終了します。

ご意見や感想などありましたら東京経済大学地域連携センターまでメールをお願いします。

次回、第4回は、「まぼろしの国分寺球場」というテーマでお話する予定です。

お相手は、ライターの近松佐左衛門でした。

最後までお聴きくださりありがとうございました。

次回もお楽しみに。

以上

出演:近松佐左衛門

録音:株式会社モジュール

編集:GO ARAI

ジングル作成・BGM作曲・演奏:GO ARAI

【参考文献】

●CD (LP)

- 『シングル・マン』 1976年
- 『RHAPSODY』 1980年
- 『MARVY』 1988年
- 『COVERS』 1988年
- 『THE TIMERS』 1989年
- 『冬の十字架』 1999年
- 『KING』 2003年
- 『GOD』 2005年
- 『夢助』 2006年
- 『忌野清志郎 完全復活祭 日本武道館』 2008年
- 『悲しいことばかり』 2013年

●書籍

- 「忌野清志郎画報 生卵」 ロックンロール研究所編 河出書房新社 1995年
- 「ロックで独立する方法」 忌野清志郎 太田出版 2009年
- 「あの頃、忌野清志郎と ボスと私の40年」 片岡たまき 宝島社 2014年
- 「遊びじゃないんだっ」 RCサクセッション マガジンハウス 1990年
- 「文芸別冊 総特集 忌野清志郎 デビュー40周年記念号」 河出書房新社 2010年
- 「ロック画報10 特集 RCサクセッションに捧ぐ」 プルース・インターアクションズ 2002年
- 「GOTTA! 忌野清志郎」 連野城太郎 角川書店 1989年
- 「もしもパンクがなかったら」 野田努 メディア総合研究所 2010年
- 「ROCKIN' ON JAPAN 特別号 忌野清志郎 1951-2009」 ロッキング・オン 2009年
- 「日々の泡立ち 真説RCサクセッション」 ロッキング・オン 1991年
- 「国立で、初期のRCサクセッションを語る」制作・発行「忌野忌」実行委員会 2019年
- 「ミュージック・マガジン増刊 忌野清志郎 永遠のバンドマン」ミュージック・マガジン 2009年
- 「愛しあってるかい」 RCサクセッション JICC 出版局 1988年
- 「忌野旅日記」 忌野清志郎 音楽之友社 1987年
- 「十年ゴム消し」 忌野清志郎 六興出版 1987年
- 「瀕死の双六問屋」 忌野清志郎 光進社 2000年
- 「ネズミに捧ぐ詩」 忌野清志郎 KADOKAWA 2014年

以上